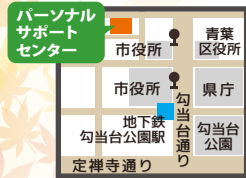


# えんがわ通信



発行＊一般社団法人パーソナルサポートセンター  
住所／仙台市青葉区二日町6-6 シャンボール青葉2階  
電話／022-399-9662 FAX／022-224-1621  
MAIL／contact@personal-support.org  
WEB／http://www.personal-support.org/

## 仮設住宅入居者と大学生ら コラボで油麩丼を販売

市内の仮設住宅入居者と宮城大食産業学部で生らでつくるボランティアサークル「@GREEN」

のメンバーが10月5、6の両日、同大キャンパスで開かれた大学祭で、油麩(あぶらふ)丼を共同販売した。

油麩丼は8月から9月にかけて、農業加工体験で学生と仮設住宅入居者が試作を繰り返し、完成させた。油麩は登米市、卵は仙台市内の会社から提供を受け、2000円で販売を実現した。



慣れた手つきで、油麩丼を仕上げる参加者



調理の様子。厨房には香ばしい匂いが漂った

「気仙沼ホルモン」など地元ゆかりのある食べ物販売する店などが軒を連ねる中、仮設住宅

入居者は、大きな段ボールをぶらさげ、「おひとついかがですか」などと道行く学生らに積極的に

声を掛けた。5日は、約80食を販売し、6日の大学祭終了時には、大学祭内の売り上げランキングで3位に食い込むほど、売れ行きは良かった。

仮設住宅入居者の男性は「実際に学生と作り上げた油麩丼を販売できるのはうれしい」、調理を担当した男性は、「学生や地域住民と交流を持つことができて良かった」などと話していた。



道行く学生らに積極的に声を掛ける参加者

## 家計の悩みを解決支援 みやぎ生協が相談室開設

PSCの連携団体の一つ「みやぎ生協」(泉区)は9月中旬、宮城野区榴岡に「くらしと家計の相談室」を開設し、生活困窮者らの家計やお金などに関する相談や支援を始める「生活相談・家計再生支援貸付事業」を始めた。

相談室には、職員5人が常駐。専門のスタッフ

が、家計の見直しや改善のためのアドバイスをするほか、公的貸付制度や弁護士との紹介なども行う。20歳以上の組合員で、家計収支が見あう人であれば、生活資金の貸付(上限300万円・金利9%期間5年)も受けるこ

とができる。みやぎ生協によると、相談室にはこれまで170件以上、相談が寄せられた(10月12日現在)。貸し付けに関する相談が最も多く、組合員の債務解消や教育費、生活費などのために、800万円以上の融資をしたという。



さまざまなくらしの相談に応じる「くらしと家計の相談室」

## Interview

実習は一つのチャンス。自分なりの「夢とそろばん」を見つけてほしい。

オプス 取締役統括部長 設楽 幸広 さん



総合ビルメンテナンス業の「オプス」(仙台市)は7月、PSCの職業体験実習の実習生を受け入れました。実習生は、グループの一員として、清掃やポスター貼り替えなどの作業に取り組み、「大変充実した実習だった」と話しています。統括部長の設楽幸広さんに、受け入れの経緯や実習生の様子などについて、お話を伺いました。

「聞き手はPSC 就労支援部 今野智子」  
今回、実習生を受け入れた経緯について、教えてください。

「いま仕事を探している人は、「夢が持てない」、「何をやらねばいいかわからない」という人が多いように感じています。実習生が、今後の人生を考えるチャンスになればという思いとともに、当社の仕事を

通じて、仕事の厳しさ、人生は、「夢とそろばん」を常に携えていくことが必要だと思っています。『夢』を実現するためには、(仕事を通じて)やりがいを見つけ、将来を描くことが大事だと考えています。一方で、生きていくためには、生活力を身につけなければなりません。収入も、得なければなりません。仕事のやりがいや厳しさを知るための場として、これからも協力していきたいと思っています。

生活困窮者が増えていることなどから、みやぎ生協が2年前から準備を進めてきた。地域購買生協の融資事業は、福岡にあるグリーンコープに続いて全国で2例目となり、東北地方では初めての取り組み。みやぎ生協では、年間の相談件数を2520件、貸付を6億3000万円と見込んでおり、今後、3年間で事業の黒字化を目指している。

## 農業体験記

先日、畑の大根やブロッコリーが、芽を出しました。うれしくもあり、その後の生育が心配でもあり、我が子の成長を見守るような気持ちです。



「おいしい」と販売先で、お褒めの言葉をもらいました。不揃いですが、愛情はいっぱい注いだ「自慢の子どもたち」。私たちにとって、お客さんの一言が土と向き合う、何よりの活力です。

PSCのサポーター(絆支援員)にも元気づけられています。心が通った会話ができ、兄弟や親子以上の関係だと思っています。

「交流の輪広がった」 わたしにとつて「えんがわ」は、家やふるさとのような存在です。震災でつらい経験をした人たちと数多く出会い、そして、仲間になることができたからです。お茶を飲みながら、出身地のことや、震災のときのことを話すなどして、交流の輪が広がってきました。何かあったときに、会おうね」という言葉が仲間との合言葉になっています。いまは、宮城大で行われている食品加工や農業体験に、参加することが楽しみです。



菊地 成子さん(73) 〓 太白区あすと長町

